下野市立南河内第二中学校

平成29年度

第 6 号

Ｈ２９．７．１３
発行者
上野　保久

校長室だより

夏休みを前にして

関東地方は連日の猛暑続きで、朝の会の時にはもう２９度、という日が珍しくありません。お陰様で、教室には昨年からエアコンが入り、２８度を超えるような暑い日に稼働しています。パソコン室、保健室、会議室、ミーティングルーム、事務室、職員室、校長室のエアコンの工事も終了し、７月３日から稼働しています。

一方、九州北部地方では停滞した梅雨前線による大雨で、大災害が起こっており、死傷者や行方不明者が多数出て、多くの人がいまだに避難している状況です。その様子は連日マスコミで取り上げられています。

同じく夏休みを迎えようとしている子どもたちの状況は、同じ日本の中で大きく違っており、被災地の人たちの安否はもとより、現在の心境を想像すると、とてもつらくなります。平穏に夏休みに入っていくことはいつも通りのことであって、それは、どこの子どもたちも同じであったろうと思います。しかし、今や状況は大違いです。私たちは様々なメディアによってその様子を知ることができます。その時どのように考えるかが、大切なのではないかと思います。

そのような中、生徒会本部から全生徒に「募金活動」の話が出ました。７月１２日の生徒会朝会で、九州北部豪雨災害についての概要と、今自分たちにできることについて提案し、今回は被害の大きかった福岡市に対して、被災地への義援金を送りたいと呼びかけました。この迅速な対応に驚くと共に、“自分たちができることをしよう。”という中学生の純粋な気持ちを感じました。“これも、立派なセルフコントロールであるな”と思いました。

学校行事から学ぶもの

学校行事は、それを通して、望ましい人間関係を形成し、集団への所属感や連帯感を深め、公共の精神を養い、協力してよりよい学校生活を築こうとする自主的、実践的な態度を育てることを目標としています。たくさんの学校学年行事がありますが、どの行事もたいへん意義のあるものですので、改めて説明したいと思います。

６月１０日に実施された『体育祭』は『健康安全･体育的行事』にあたります。心身の健全な発達や健康の維持増進などについての理解を深め、安全な行動や規律ある集団行動の体得、運動に親しむ態度の育成、責任感や連帯感の涵養、体力の向上などに資するような活動を行います。特に、「規律ある集団行動の体得」「運動に親しむ態度の育成」「責任感や連帯感の涵養」が期待されると思います。

また、５月に実施された修学旅行（３年生)、６月末の宿泊学習（１年生)、１月実施予定の立志記念宿泊スキー学習（２年生）は、『旅行･集団宿泊的行事』にあたります。平素と異なる生活環境にあって、見聞を広め、自然や文化などに親しむとともに、生活集団の在り方や公衆道徳などについての望ましい体験を積むことができるような活動を行います。特に、平素と異なる生活環境にあって、「見聞を広める」「自然や文化などに親しむ」「生活集団の在り方や公衆道徳を考える」ということが期待されます。

また、それぞれの行事は複合的な内容をもっています。例えば、２年生の「立志記念スキー宿泊学習」は、スキー場ホテルで行われる『立志式』もメインであり、これは『儀式的行事』ということになります。入学式や卒業式と同様に、学校生活に有意義な変化や折り目を付け、厳粛で清新な気分を味わい、新しい生活の展開への動機付けとなるような活動を行います。ここでは、「学校生活に有意義な変化や折り目を付ける」「厳粛で清新な気分を味わう」「新しい生活の展開への動機付けとなる」ということが期待されます。

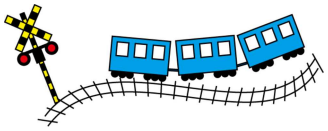
このように、学校行事には、集団で学ぶことの意味付けがあり、そこでの学びは、やがて社会に出たときの『生きる力』になると考えられています。

今後の学校行事につきまして、改めまして、ご理解ご協力をお願いします。

これはおすすめ私の一冊

『吉野　弘詩集』
吉野　弘（よしの　ひろし）著　　ハルキ文庫　６８０円

もともと詩が好きで、いろいろな詩を読んできました。幼児から１００歳を過ぎた人の詩や、和歌や短歌、漢詩などの古典の詩など。好きな歌の歌詞も、詩と思って読んでいます。その中で、特に好きな詩が吉野弘さんの『夕焼け』という詩です。吉野さんの詩は全体的に読んでいて心が落ち着きますが、この詩は切ない気持ちになります。



夕焼け　　吉野　弘

いつものことだが
電車は満員だった。
そして
いつものことだが
若者と娘が腰をおろし
としよりが立っていた。
うつむいていた娘が立って
としよりに席をゆずった。
そそくさととしよりが坐った。
礼も言わずにとしよりは次の駅で降りた。
娘は坐った。
別のとしよりが娘の前に
横あいから押されてきた。
娘はうつむいた。
しかし
又立って
席を
そのとしよりにゆずった。
としよりは次の駅で礼を言って降りた。
娘は坐った。
二度あることは　と言う通り
別のとしよりが娘の前に
押し出された。
可哀想に
娘はうつむいて
そして今度は席を立たなかった。
次の駅も
次の駅も
下唇をキュッと噛んで
身体をこわばらせて―。
僕は電車を降りた。
固くなってうつむいて
娘はどこまで行ったろう。
やさしい心の持ち主は
いつでもどこでも
われにもあらず受難者となる。
何故って
やさしい心の持ち主は
他人のつらさを
自分のつらさのように
感じるから。
やさしい心に責められながら
娘はどこまでゆけるだろう。
下唇を噛んで
つらい気持ちで
美しい夕焼けも見ないで。

校長室の窓から

○　６月２２日（木）、清掃の時間に学校周りのゴミ拾いをしました。通常、週に１，２回ゴミ拾いをしますが、共通して感じられるのは、ゴミの種類と落ちている場所がだいたいが同じだということです。これはどういうことかと考えますと、ほぼ同じ人がゴミを捨てているということではないかと思われます。何本ものワンカップ（日本酒）のビンやビールの空き缶は、ある地点の植え込みの奥の方。タバコの吸い殻は、街灯の下と横断歩道の手前。タバコの空き箱は植え込みの上に・・・。

この日、タバコの吸い殻を、ちょうど３０本拾いました。“まったく、仕方がないなあ”と思いながら、教員になりたての頃、生徒会と共に地域のクリーン活動に参加したことを思い出しました。あまりにもたくさんのゴミを前にして、その時強く思ったのは、「自分はゴミを拾う子どもたちを育てよう。ゴミを拾う子どもはゴミを捨てないはずだから。」ということでした。

明るい社会を目指して、そんなことを考えていた若い頃を思い出しました。今も、その思いは変わっていません。